

訛 伝

—「須磨源氏」の詞章—

西野 春 雄

光源氏の霊が春の須磨の浦に現れ、波にくだける月の光を浴びながら遊舞する「須磨源氏」は、複雑な変遷を経ている作品のようである。現在は、観世・宝生・金剛の三流で演じているが、観世流のばあい、いわゆる別能二十八番のうちであり、正式には幕末以後に所演曲に加えられたもので、謡としてはとなく、能としては長い中絶の時期があった。

今は演じていない喜多流でも、幕末から明治にかけて復曲している。もっともその後の歩みは複雑で、大正本まではあったが、昭和初年版で除かれ、昭和十年代の標準本では復活したもの、戦後はまた廃された。

各流とも詞章の異同が少なからずあり、訛伝もまた多い。こうした現象は、この作品が創作されからずと演じつがれて来たというのではなく、しばらく退転していたため、伝承が途絶えてしまったことを想像させる。訛伝が生じたのも、そうした流れと一体のものであろう。

「須磨源氏」の現存最古の謡本は、信光丸本の青表紙本をもって書写し、元頼が章句を付した旨をいう、天文二十四年（一五五五）八月九日の奥書のある観世小次郎元頼本で、この本および室町末期の謡本と近世以降の各流謡本とを比べると、訛伝の様相がほぼわかる。こまかな異同は省略するが、たとえば、早舞に入る直前の文句は、

- ① 荒海の波風、沈々たり（観世大成版）
- ② 荒海の浪風、深々たり（観世梅若派）
- ③ 荒海の波風、濺々たり（観世刊行会本）
- ④ 青海の波風、しんしんたり（宝生・金剛）
- ⑤ 荒海の波風、艶々たり（喜多）

となつてはいるが、元頼本や室町末期の写本は「あをうみのなみ風、えんえんたり」で、これが古型であろう（天和二年刊野田本なども「えんえんたり」）。ここは舞楽「青海波」を読みこんだのであり、「えんえん」は、字をあてるとすれば、③がいい。月光が波に映って美しく光るようすを表現している。

また、舞あとのロンギのなかに、須磨の巻での光源氏の有様を叙した文章を綴った部分があるが、そこにも訛伝がみられる。たとえば、

- ⑥ 所から山賤（やまづる）へきらといはれし（観・宝）
 - ⑦ 所から山賤めきてと言はれし（観梅若派）
 - ⑧ 所から山人の碧羅（あざむす）といはれし（剛）
 - ⑨ 所から山人のべきらといはれし（喜）
- と謡う部分で、ここは元頼本の「山がつめきてといはれし」が正しく、⑦がいい。「めきて」が「へきら」に誤伝した例である。

続く文章にも訛りがある。諸流、

- ⑩ ゆるし色の綺羅（観・宝・剛・喜）
 - ⑪ ゆるし色の黄がちなる（観梅若派）
- とあるが、元頼本は「ゆるし色のきがちなるに」とあって⑩に一致する。ここは須磨の巻の「山賤めきて、ゆるし色の黄がちなるに、青鈍の狩衣指貫、うちやつれて、殊更に田舎びもてなし給へるしも、いみじう見るに笑まれて清らなり」とある本文を背景にしていること一目瞭然。こうした訛伝の集中したのが、後場の後半なのであった。

異同は前場にもある。日向の国宮崎の社官藤原の興範（ワキ）が伊勢参宮を思い立ち、その途中で須磨の旧跡を訪れるという設定は、元頼本以下、ほとんどの諸本に共通するが、喜多流は、ただ都に上る途次とする。また、

元頼本や観世流は前ジテの登場歌に二ノ句まであるが、宝生・金剛・喜多の三流にはない。元頼本が古型を伝えているとすれば、他はその後の改変ということになる（が、元頼本の段階での改訂もありうるかもしれない）。

こうした細部の異同よりもっと大きいのが巻の名を列挙しつつ光源氏の生涯を物語る「源氏の謡」とでも呼ぶべき一段である。ここは前場の中心であるとともに、この作品の骨核をなしているが、この謡い物はすでに世阿弥の青年時代（一九歳以前）に存在していた。それは、『申楽談儀』の文字訛り・節訛りの条で、田楽の亀阿の謡い方にふれ、

「光源氏と名を呼ぶる」、此「と」文字、律にて突くべし。同じ声にては突くべからず。南阿弥陀仏、面白しといはれし節なり

とあって、音曲の名手亀阿の謡いぶりを、素人ながら「節の上手」と讃えられた海老名の南阿弥陀仏（一三八一年歿）が面白しと批評した記事が見え、そこに引かれている詞章が「源氏の謡」に一致するからである。一代の雅人光源氏の華やかな生涯を綴った内容といい、後に述べる作曲上の特異性といい、この「源氏の謡」は独立の謡い物で、亀阿弥の作曲になるものらしい。そして、この謡い物を中心素材として後人（たとえば世阿弥）によって完曲が作られたと考えられる。晩年の世阿弥が

金春禪竹に与えた能本の目録に見える「ヒカルゲンジ」が「須磨源氏」の古名に相違なく、『五音』に幽曲の例として「須磨 付源氏」をあげ、前ジテ登場歌のサシの冒頭「これは津の国須磨の浦に」を掲出しているのが、完曲が存在したことは確実であり、作曲者名を書かず載せていることから作曲者は世阿弥かと推定されてもいる。

さて、「源氏の謡」だが、諸流の扱いはまちまちである。整理してみると次のとおり。

観世 宝生 金剛 喜多

忘れて過ぎし……クリ クリ クリ クリ

いとどしく……サシ サシ サシ (ナシ)

いとも畏き……上哥 クセ クセ サシ

(箒木の巻に……) ← ← ← クセ

諸流でそれぞれ違うのは、ここが元来は上哥とクセが合体したような特殊な節付け（上――上）になっていることに起因する。上哥クセと記した本もあるほどで、この特異性を象徴していよう。梅若派では「箒木の巻に」からを「(クセ)」と扱っているが、これも苦心のあとかもしれない。元頼本は観世の形だが、初句「いとも畏き勅により」を繰り返している。もともとは哥であろう。

そして、このような特殊な旋律型は、亀阿の作曲になる「女郎花の古き謡」にも見える。説明は省くが、この点も田楽能の謡い物

を猿楽能に撰取して作られたのが「須磨源氏」であることを示す一証左であろう。

なお、かつて「須磨」なる謡い物があり、また鬼能もあった。それと「須磨源氏」がどう関わるか、別の機会に述べてみたい。

(法政大学教授)

